

# ゴータマ・ブツダの遺産

その知性と慈愛と平安のメッセージ

シヤンカール・ダヤール・シヤルマ

友岡雅弥 訳

ブツダの教説をひもとき、しばし思索を重ねるたびごとに、私はその教えのより深い意味に出会う。そして、今を生きる私たちにとって、また現代の社会にとって、その教えがいかに重要かをますます実感するのである。タターガタ（如来）のメッセージは、個人にとっても、個人ではなく、人と人との相互の関係にとっても重要である。それは私たちの社会や国家にとって、また複数の国家間の関係にとって、そしてまさしく全人類にとって、極めて重い意義を持っている。

シヤキヤ・ムニ（釈尊）は、すべての人間の思考および

び行動における「心の優位性」を強調した。正しい行動は、心を清浄たらしめてゆく以外に得ることはできないのである。生涯をかけて、シヤキヤ・ムニは、その振舞いとその明瞭な思想によって、真の自己実現、すなわちニルヴァーナ（涅槃）への道は、心の浄化の内にこそあることを示し続けたのである。

『ダンマ・パダ』冒頭の素晴らしい詩句は、こう語りかける。

「ものごとはすべて心を先とし、心を主とし、心によ

り作られる。

もし人が、汚れた心で、語りそして行えば、苦しみがつきまとうこと、車を引く牛の足に、車輪の従うことし<sup>(1)</sup>

続く一節には次のようにある。

「ものごとはすべて心を先とし、心を主とし、心によ  
り作られる。

もし人が、清らかな心で、語りそして行えば、楽しみ  
が従うこと、身に影が従うことし<sup>(2)</sup>」

ここで、ブッダが彼の哲学を説いた状況や時代背景を  
思い出してみたい。

当時は、既存の宗教が「制度化」され、世襲制に基づ  
く強固な階級制度を進展させた時代であった。

尊敬するジャワハルラル・ネルーは、『インドの発見』  
で次のように述べている。

「ブッダは勇敢にも、俗信、迷信、儀式、祭式執行者

たちの狡猾な術、及びそれに付随するすべての既得権益

に立ち向かった。また、彼は形而上学的、神学的な態度、  
奇跡、啓示、そして超自然的なものとかかわることを批

判した。彼の訴えは、人々の論理、理性そして経験に向  
けてなされたのである。彼の強調するところは倫理であ

り、彼の方法は心理分析の手法であった。彼の取ったす  
べての道すじは、形而上学的思考のよどんだ空気の後で、  
山からの涼風のようにやってくる<sup>(3)</sup>」

ブッダがその合理的な「行動と思考の哲学」を説いた  
状況は、以上のようなものであった。彼は人々に、彼自  
身の思想も含めたすべての哲学、思想、慣習を、理性と

道理の諸基準に照らし検証せよ、と勧めたのである。

「アングクッタラ・ニカーヤ」において、ブッダはカー  
ラーマ地方の人々に、次のように述べている。

「カーラーマの人々よ！ あなた方は物事を判断する  
時、次のように判断してはならない。

誰かから伝え聞いた（訳者註・風説）からといって（判

断してはならない）。

伝統的には認されているからといって。

またはそう決まっているからといって。

聖典に記されているからといって。

あるいは議論の勢いに流されて。

「これがスジだ」と誰かに言われたからといって。

形や形の美しさによって。

あるいはその沙門があなたの師であるからといって、

判断してはならない。

カーラーマの人々よ。あなたがたは、あなたがた自身  
の経験から『何々の行動は悪である。咎がある。賢者か  
ら非難されている。不利益と苦とを生じるものである』

と知るならば、カーラーマの人々よ、その時こそ、その  
行動を捨てよ<sup>(4)</sup>」

ブッダには、合理的な思考がすべてに優越するという  
信念があった。故に、人々に自らの教えでさえ疑問を持  
たずに信じ込むことがないよう説いたのである。

「金細工師が、本物の金であるかを調べるため（金属を）  
溶かし打つように、比丘たちよ、様々な方法で私の教え  
も調べるがよい。确实だと分かったもののみ受け入れよ。  
それらがたとえ私の教えだからといって、試すことなく  
受け入れてはならない<sup>(5)</sup>」

ブッダの哲学の真髄はいわゆる「初転法輪の教え」で  
説かれた「中道」に含まれ、またそこから広がったもの  
である。この幸いなるサールナート（訳者註・この講演は  
ヴァーラナシーのサールナートで行われた）の聖なる「鹿野  
苑」で、彼は語った。

「比丘たちよ、中道はこれらの二つの極端（訳者註・快  
楽主義と苦行主義）を避け、如来によって発見された。こ  
の道は開眼の道、真理を知る知を生じ、人を心の平安に  
導き、よりすぐれた智慧へ、そして完全な悟りへ、涅槃  
へと導く<sup>(6)</sup>」

この教えに込められた勸戒は、個人のためにもまた社

会のためにも、人生のある面において、極端が引き起こすアンバランスや過剰を避けることである。個人のとるべき正しい態度とは、思考や行動における節度、バランス、調和のとれた実践である。『清浄道論』(第十六章四節)でも示されているように、求道者のため「八つの正しい道」(八正道)は次のように述べられる。

「正しい見解」(正見)は、求道者の行く道を照らすた  
いまつになる。

「正しい思い」(正思)は、求道者の導き手となる。

「正しいことば」(正語)は、途上の住み家となる。

求道者の歩みはまっすぐである。それが「正しい行い」

(正業)である故に。

その休息は、「正しい生活法」(正命)によって暮らす  
ことである。

「正しい努力」(正精進)が、求道者の一步一步の足跡  
となる。

「正しい念い」(正念)は、その一息一息となり、「正  
しい精神統一」(正定)は、求道の道程に従う平安を与

「もろもろの悪を行わず、善を行うこと、自己の心を  
浄化すること。これがもろもろのブッダの教えである」<sup>(9)</sup>

このような仏教の教えは、ただ単に個人的な苦しみの  
終わりと涅槃のためだけではなく、社会全体の進歩と繁  
栄のためにも、ふさわしいものである。国家にとって、  
「中道」すなわち「極端の回避の道」は、対話、協力そ  
して相互の調停に基づく政治プロセスの遂行につながる  
だろう。必然的に、合意を得るための努力や、また最大  
多数の最高善を得るための努力が要請されることにな  
る。また、社会全体がかかわる問題の合意にこぎつける  
ために、理性的な思考と論理に基づく民主的な議論と論  
議も必要となつてこよう。

『マハーパリニッパーナ・スッタタ』に記されてい  
る洞察豊かな「不退の価値についての比丘への教え」の  
なかで、ブッダは丹念に民主的社会的基礎に最も明瞭な  
表現を与えている。

この「宣言」の中から、「民主的な道」の進歩を勝ち

える。

同様に、ブッダは抑制の大切さを強調している。彼は  
こう語る。

「目において慎むことは善きことである。耳において  
慎むことは善きことである。鼻において慎むことは善き  
ことである。舌において慎むことは善きことである。身  
において慎むことは善きことである。ことばにおいて慎  
むことは善きことである。心において慎むことは善きこ  
とである。すべての感覚において慎むことは善きこと  
である。すべての感覚において慎む比丘は、すべての苦か  
ら脱する」<sup>(10)</sup>

ブッダのメッセージは、悪から目を背けるのではなく、  
ねばり強くそれを克服し、清浄さによって悪を治すこと  
といえる。

『ダンマ・パダ』の美しい詩句に同様の哲学が示され  
ている。

とるために、私が特に重要と思う箇所をここで引用した  
<sup>(10)</sup>。

ここにあらわれるすべての考えは、特筆すべき意義で  
満ちている。よく理解し、分析し、現実に適用する価値  
がある。

「比丘たちよ。私は説こう。サンガ(僧伽、仏教者の集い  
・教団)の繁栄の条件を。よく聴きなさい。さあ今、私は  
説こう。

比丘たちよ。同志がしばしば集会を開き、多く人が集  
会に集うあいだは(サンガには繁栄がある)。

同志が仲良く集い、散会の時も仲良く、サンガの問題  
に関して、仲良く対処するあいだは。

比丘たちよ。同志が、経験上『良い』と認められたこ  
とを廃棄せず、慎重に検証されたことのみを採り入れて  
いるあいだは。

長老が正義を貫いているあいだは。

同志が長老を尊び、敬い、支え、彼らのことばに耳を  
傾けているあいだは。

同志が、怠惰と懈怠に流されていらないあいだは。精神作用についてのより高次の七種の智慧を同志自身(11)が習修しているあいだは——その七つとは、真実を追及すること(摂法)、求道に努力すること(精進)、求道に歡喜を抱くこと(喜)、身心を慎むこと(輕安)、執着の制御(捨)、心を集中すること(定)、心を平靜に保つこと(念)——以上のことが守られているならば、サンガは衰亡することなく、繁榮するだろう。故に、比丘たちよ、信仰に満ち、内に慎みあり、外に悪を恐れ、学ぶに真剣で、精進の心強く、念いが確立しており、智慧あるものとあれ(12)。

ブッダは正しい行動と平等な対話を強調するに加え、さらに、サンガを統治する絶対的權威ほどの個人にも付与されてはならないとの強い信念を持っていた。弟子に「後継者はだれか」と尋ねられた時も、彼はダンマ(訳者註・サンスクリット語では「ダルマ」すなわち「法」が究極の權威であると述べたのである(13)。この見解はすでに二千五百年以上も前のものだが、今ほど説得力をもって

異なつた思想や哲学の流派に寛容であり、それらを尊重しているのである。

「仏教の寛容性」については、現在のペシャワール近くのシャーフバーズガリーにあるアショーカ王の摩崖法勅に刻まれた碑文が、その十分な証拠となる。そこには次のように記されている。

「精神的強さを増進せしめるものは多様である。しかしその根本は、時と節度をわきまえず自らの宗教を宣揚したり、他の宗教を非難したり、軽々に他の宗教を評価することを避けるよう、言葉に気をつけることである。時には、(非難しないだけでなく)他宗教を信ずる人々をも称えるべきである。このようにすれば、必ず自らの宗教の発展につながり、他宗教を信する人々にも恩恵を与えることになる。逆の行為をすれば、自らの宗教にも傷をつけ、他人の宗教を害することになる。

自らの宗教に帰依するあまり、またそれを他にぬきんでて輝かしめようと、自讃毀他の行為に走る人は、自身の信仰を確実に傷つけるのである(15)。

私たちに迫ってくる時はなかつたろう。これはわが国の憲法の内奥に、そして「生きている」民主的諸機関の根本に流れる精神であり、常々私たちにインスピレーションを与え、私たちを導いてくれる。私は数多くのなかからほんの一例、「我が近代国家」が深く古の精神と伝統に根ざしていることを示す例を示しただけである。

この民主的アプローチは、異なる意見、時として激しく衝突する意見に対しても、対話を通じて、架橋し融和を図ってきた。「ダンマ・パダ」において、ブッダは語っている。

「もろもろの怨みは、怨みによって鎮まることはない。友好の心によってのみ鎮まる。これが永久の法である(16)。

仏教が説く理性と道理に基づく民主的な生活様式——その至高の教義の一つに、アヒンサー(不殺生戒)がある。「非暴力」「平和」という意味である。他から仏教に採り入れられた教えであるが、仏教はその価値と根本原理をきちんと認識して採り入れた。まさに、仏教は本来、

私たちはブッダの教えから滋養と創造的刺激を受け、真剣にそれを私達自身の思想と行動に應用していくべきであると、私は感じている。

以上のような合理性、中庸性そして調和性のアプローチの奥底には、人間の尊厳への、またすべての生命への「慈悲」を貴ぶ態度が内在している。ブッダによると、すべての人間は平等である。すべての地球上の生き物は等しく「苦」に苛まれ、等しく救済される、すなわち涅槃に至る権利を持つ。彼はカースト制度——次第に強固になり、創造性と進歩を阻み、人と人とを対立させる硬直した差別構造——に抵抗した。

『スッタ・ニパータ』の中で、ブッダは、大切なのは行いのみであり、人が優れているか否かは、生まれやカーストではなくその人の行いによって決まる、と教えている(17)。また、同様の教えは「ダンマ・パダ」の美しい二つの詩句にあらわれる。

ブッダが語った——

「善き人は、ヒマラーヤのごとく、遠くにあつても目に映える。

不善なる人は、夜放たれた矢のごとく、いかに近くとも見えないことなし」<sup>(17)</sup>

「花の香りは風に逆らい行くことなし。梅檀の香り、伽羅の香りも、ジャスミンの香りも。

善の人々の香り(評判)のみ風に逆らい行く。徳ある人の香りは、風にのり遍く一切の方向に薫り行く」<sup>(18)</sup>

『ジャータカ』(本生譚)中の物語は、私たちになじみ深いものである。『ジャータカ』は智慧と知識で満たされた「埋もれた財宝」であり、私たちに当時の生活について、豊かな情報を提供してくれる。その物語は、すべてのカーストに属する人々がブッダのもとに集い、「法に帰命する」あり様を生き生きと詳細に描き出している。ブッダが机上の議論ではなく、平等と非差別に現実にかかわったことは、教えが一部のエリートの特権領域であったサンスクリットという「正統」言語ではなく、大衆

の日常語で伝えられたという伝統を見ればよく分かる。まさに、彼は庶民が日常使う言葉や言い回しを使い、在家にも即座に分かるような言い方で深淵な哲理を説いたのである。譬え話や比喩、日頃よく使うことわざ(前述の「ダンマ・パダ」の「花の香り」や「山々の偉容」などはその好例と言える)を使うことによって、彼の哲学を非常に親しみ深いものとしたのである。ブッダは最も深い教えや永遠の真理を、「ただの」車輪を譬えとして用い、説明している。「輻」(車輪の轂と最外周をつなぐ放射状の木、スポーク)は正しい行いの戒めであり、その一律の長さ(正義、「輞」(車輪の最外部の円形の木)が智慧、「轂」(車輪をめぐらむ軸受)が中庸と思慮深さ、そこにしっかりとめ込まれた「車軸」が真理である。

この虚けられた人々への思い、そして慈悲は、すべての人々に対する仁愛と慈善の具体的行為につながっていく。そのような行為によって功德が増すとされる。それは単なる贈与ではなく、人として果たすべき「道」(ダンマ)を実践する布施行であった。特に苦しむ人や困窮している人々を支えるのは、(余裕があるからするのではな

く)「宗教的つとめ」なのである。おそらくこのブッダの教えを最も実践した一番有名な「後継者」はアショーカ王だろう。王は在位中、大衆の福祉の増進のため、国中で多くの公共的事業を開設した。水道と灌漑用水の建設プロジェクトを開始し、病院、救貧施設、橋と道路を、彼の「果たすべき役割」、つまり彼の「道」として建設していったのである。かくして、「人類への奉仕」が、私たちインドのエートスの中心的要素となったのである。

註

- (1) 「ダンマ・パダ」第一節。cf. *Dhamma-pada*, ed. O. von Hinüber and K. R. Norman, The Pali Text Society, 1994. 日本語訳は、次のものを参考にした。藤田宏達「ダンマ・パダ(真理のことば)」「原始仏典7 ブッダの詩1」講談社、一九八六年。中村元「真理のことば 感興のことば」、岩波書店、一九七八年。
- (2) 「ダンマ・パダ」第二節。
- (3) J. ネル、辻直四郎・飯塚浩二・臘山芳郎訳「インドの発見」上、岩波書店、一九五三年、一五三頁参照。
- (4) 「アングッタラ・ニカーヤ」第三章六五節。cf.

- (5) 出典不詳。なお、「ブッダ・チャリタ」第五章四二節以下参照。
- (6) 「初転法輪の教え」、すなわち經典としての「初転法輪経」はアショーカ王によって、ヒマラーヤ地方に派遣された伝道師マジマが携えて行った經典であることはよく知られている。しかし、今現在、一つの經典としてパリ、サンスクリットともに伝わっていない。漢訳として、安世高訳「仏説転法輪経」(大正、二卷五〇三頁)、義浄訳「仏説三転法輪経」(大正、二卷五〇四頁)がある。

- (7) 「八正道」それぞれの現代語は、中村元博士のものを引用した。
- (8) 「ダンマ・パダ」第三六〇—三六一節。

なお、サンスクリットの断簡が発見され、刊行されている。cf. E. Waldschmidt, *Bruchstücke buddhistischer Sutras*, Leipzig, 1932.

所における式典集会での記念スピーチとして用意されたもので  
す

- (9) 『ダンマ・パダ』第一八三節。いわゆる「七仏通説偈」である。漢訳では「諸悪莫作、諸善奉行、自淨其意、是諸仏教」となり、アジア諸国でよく知られた一句である。
- (10) 『大般涅槃経』第一章六節以下。ただし、原文では、「衰亡をきたさない法」(不退法)を七・七・七・七・七・六と合計四十一がリストアップされている。このうち最初の七不退法がもとの伝承にあった部分で、あとは後の付加とされている。
- 本論では、最初の七項の多くと四番目、三番目の七項の要旨が挙げられている。
- (11) いわゆる七覺支が挙げられている。
- (12) 原文では、三番目の七不退法。
- (13) 『大般涅槃経』第二章二四節以下、第六章一節参照。
- (14) 『ダンマ・パダ』第五節。
- (15) cf. E. Hultsch, *Inscription of Asoka*, new edition, Oxford, 1925, p. 64 f.
- (16) 『スッタ・ニパータ』第一四二節。
- (17) 『ダンマ・パダ』第五四節。
- (18) 『ダンマ・パダ』第三〇四節。
- (19) cf. *Samyutta-nikaya*, vol. I, ed. M. L. Feer. The Pali Text Society, 1973, p. 33.
- (シヤンカール・ダヤール・シャルマ、インド大統領)  
(ともおかまさや・東洋哲学研究所委嘱研究員)

(本稿は本年八月に行われたインド・高等チベット学中央研究